

(98) 岩手県湯田町の和賀仙人鉾山跡

参考文献 (1)、(2)、(3) を手引きに探索を行った。本鉾山はいくつかの鉾床群からなっていた。下遠平鉾床と遠平鉾床の探索を行った。初回は草木が生い茂っていたこと、時間がなかったことから、和賀川への下り道を見つけないことができなかった。が、2回目である春の時期は、山中の見通しの良いときであり、容易に下り道を見つけることができた。図1のA、Bの2カ所である。Bからは河床まで安全に下ることができ、Aからは、下り道は鉾山跡で途切れており、その先は断崖絶壁となって、河床へと落ち込んでいるので、無理そうである。

ここまでの経路を述べよう。東北道を北上してきて、北上JCTで秋田道に入る。そして最初のICである北上西で、秋田道を降る。225号に入り、少し北上してから、107号に入り、西行して行く。仙人地区に入り、トンネルを抜けると、支流沢に架かっている橋の上で、道路は大きく左に曲がる。この曲がりの所の右手に分岐道が伸びており、この分岐道に入った直ぐに、駐車に適当な空き地がある。ここに車を止めると良い。空き地の目の下には、何故かヘリコプターの発着場がある。B点の所にも、107号の左脇に、適当な空き地がある。ここにも車をおけるであろう。道路の右側は山の急斜面、左側は谷であり、道路との間に高い防護壁が設置されている。

Aの箇所では、ズリおよび鉱山施設跡を見つけた。斜面全体にズリ、転石があり、赤鉄鉱の原石の
良い標本を採集することは、現在でも容易である。多くの鉱山設備が錆びて残っている。鉱山見学地
として、よろしい場所ではないかと思う。潰れた蟻地獄のような大きな陥没跡があった。縦坑口跡と
思われるが。

Bの箇所には道路脇に適当な空き地がある。が、空き地の所には防護壁は無い。ここに車を止めるのも良いであろう。和賀川に向かって、幅が広いが手入れが入っていない道が、右へ右へと下っている。河床までたどり着いて道は終わっている。湯田ダムの真下近くである。幅が広いことを考慮すると、ダム建設のために切り開かれた工事道路と思われるが、安全に上の道路から和賀川の河床まで降りてこられる。今回、湯田ダムが放水を行っていた。そのためであろう、和賀川の水量が多く、河床を渡って、対岸などへの徒渉、河原での転石観察は無理であった。放水が行われていなければ、川は渇水状態であるはずなので、時期を見計らって来ると良いであろう。

調査日 2013年4月、その他

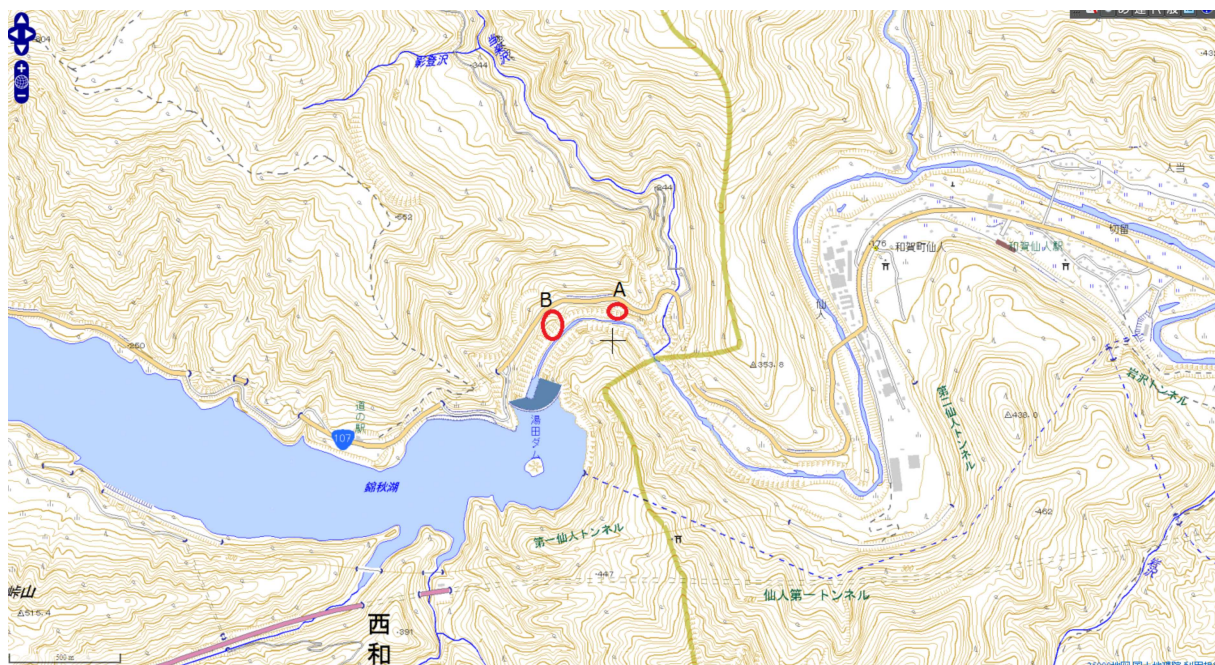


図 1 国土地理院の地図サービスホームページより複写掲載。A が下遠平鉱床跡。赤鉄鉱の良い標本の採集は今でも容易である。B は文献 (2)、(3) を参考に、遠平鉱床跡が残っているであろうと予想し、探査をした箇所である。

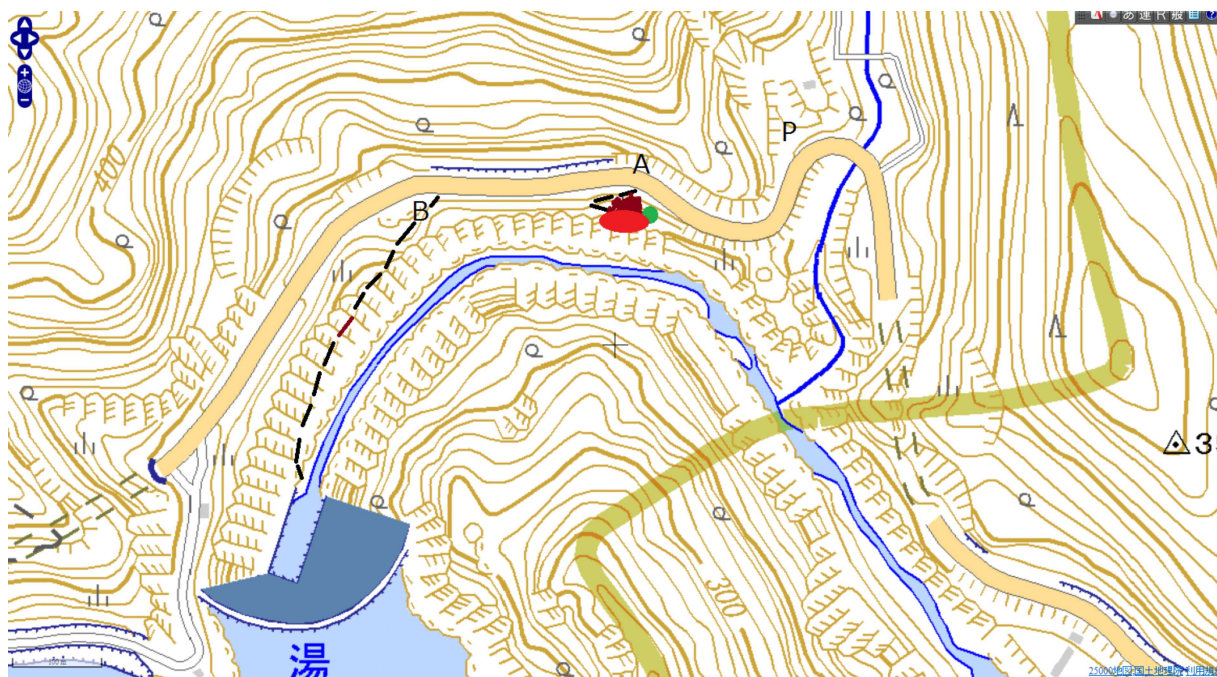


図2 図1の拡大図。Pのあたりに適当な空き地がある。A付近から沢に向かって下れる道が残っている。が、下れるのは途中まで。道は黒破線で示している。途中斜面一帯、道一杯に、赤鉄鉱のズリ、転石がある。茶色の塗り潰し部分である。黄緑丸が坑口跡らしい箇所。赤丸で、残存している施設器具の箇所を示している。B点の所からは、確実に和賀川の河床までおりることができる。幅広い道であるが、手入れされておらず、倒木等があり歩きにくい、安全に河床までおりられる。この道のあたりに、遠平鉱床跡があると考えたのであるが、その痕跡は見つけることができなかった。

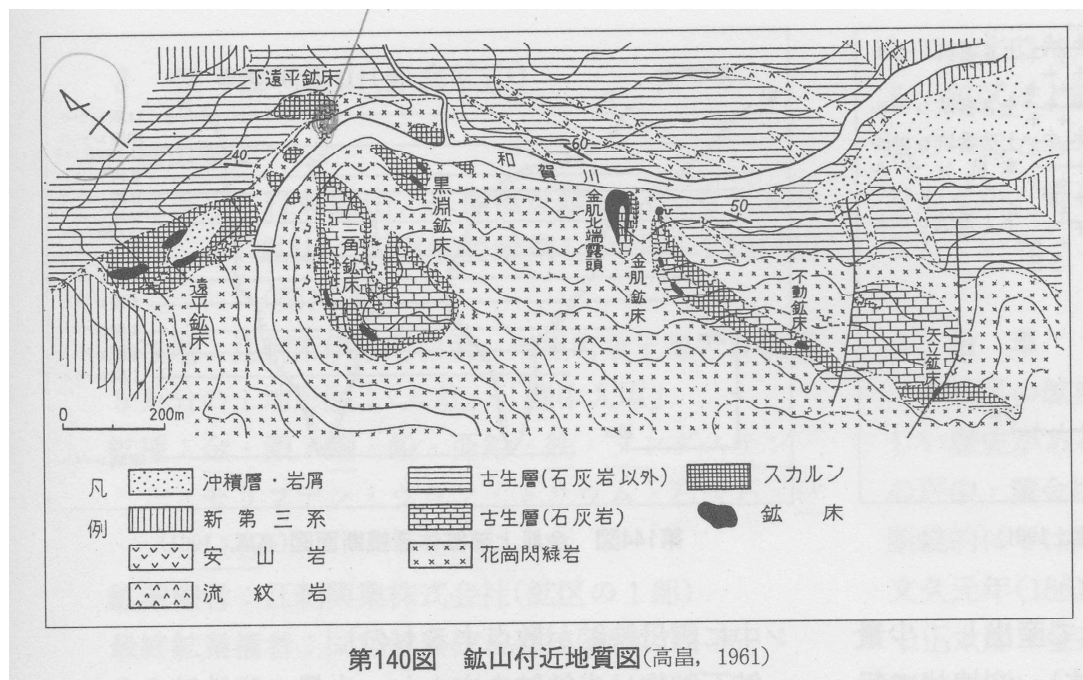


図3 参考文献(2)より。図2と対照すると、A点の所は、下遠平鉱床に対応している。図2のB点から、遠平鉱床跡を目指して河床まで下ったのであるが、鉱床跡の痕跡は見つけることができなかった。ただ、安全、確実に和賀川の河床まで下れる道を見いだしたことが、成果の一つである。幅の広さ、ダム你真下近傍まで伸びていることから、この道はダム工事のために開削されたものであろう。この道の開削と、上にある107号線の拡幅に伴い、遠平鉱床跡は埋没・消滅してしまったのかもしれない。河川の改修、ダムの設置などで、鉱山跡が消滅してしまう例は少なくない。



図4 参考文献(3)より。60年も前の地形図である。当時の道路が明瞭に記されている。下遠平鉱床のあたりには何も記号類はないが、遠平の所には、川の上に、気になる記号類があるし、図3で明瞭であるが、和賀側に橋が架かっていたことがわかる。地域・地形的に、鉱山専用橋であったと思われる。磁界にはその跡を是非とも確認したいし、河床での転石観察もしてみたい。

鉱山跡写真



写真1 道路の先は湯田ダムである。日程にダム見学を入れておくのも良い。図2中のA点のところである。前方左側に、防護壁などは無く、和賀川への下り道がある。P点から、このあたりには、山側から崩れ落ちてきた転石が道端に転がっている。良く観察すると、スカルン化した石が多い。少し鉱染している石もある。



写真2 A点から下ってきた。一面枯れ葉と若草のようであるが、道も含め、斜面一帯、赤鉄鉱のズリと転石である。今でも良い標本を容易に採集できよう。



写真3 中央の白い流れが、和賀川。細長い平地に、レール、トロツコが残っていた。周りには、放置された鉱山機器が沢山ある。これはそのごく一部である。鉱山跡の見学先として、良い場所かもしれない。



写真4 埋まった蟻地獄のような跡。縦坑口跡と思われるが。

採集鉱物写真

良好な赤鉄鉱の標本を幾つか採集できた。ありふれた物なので、未掲載。

参考文献

- (1)「鉱物観察ガイド」、松原 聡 編著、東海大学出版、2008年。
- (2)「新岩手県鉱山誌」、南部松夫、高橋維一郎、東北大学出版、2003年。
- (3)「地質調査所月報」、室住正義、第4巻、第10号、昭和27年調査。